

探 検

藤井 啓喜

一体、探検部とは何だろう？これを言葉で言うのは非常に難しい気がする。そもそも、この探検という言葉がよくわからない。人に聞いても誰も納得のいく説明をしてくれない。

確かに、一般の探検部という探検とは川下り、沢登りといったものだろう。しかし、関西大学探検部という探検とはそう簡単に表現できるものではないと思う。

探検部とは、山を登ったり、川を下ったり、洞窟に入ってみたり、そういうアウトドア関係のスポーツをする部活ではない。やっていることを見ればそのように見えるかもしれないが、実は違うのである。

では探検部とは何か？

探検部とは、探検をする部活である。では、沢に登るための部活でない探検部が何故沢に登るか？それが探検だから。冒険だから。心が躍るからである。川を下るのも、洞窟に入るのも、全部同じ。要するに、心躍るような体験を求めるのが探検部。

結局何が言いたいのかというと、探検部の決まった形なんてないと思う。沢登りだって川だって、面白いと思うからやる。「沢に登り、川を下り、色々やるから探検部」ではなくて、「いろいろ面白いことをやりたい。だから沢、川、洞窟、どこでも行ってみる」。

結局やってることは変わらないけど、後者のほうが自発的で自由な感じである。私はこれが探検部なんだと思う。

関西大学に入学して数ある体育会、文化会の部活、サークル活動があるなか探検部に入部した。それは、一番心が躍り、面白いことをやれそうだから。むしろ、いろいろ面白いことをやるために探検部に入部した。すると、その先には日常の生活を送っていれば決して出会うことのない期待以上の衝撃的な経験が待ち受けていた。大阪という人の音やストレスで溢れかえった大都会を離れ、鳥たちの鳴き声や川のせせらぎが聞こえるところが我々の探検するフィールドである。このような自然のなかで、川下り、沢登りをして心が躍らないはずがない、面白くないはずがない。

また、忘れてはならないのが、私たちは自然というフィールドに普通では味わえない経験をさせてもらっている。だから、自然への感謝という気持ちを絶対に忘れてはならない。よって、地球上で起こっている様々な環境問題、森林伐採などの地球規模の問題に人一倍関心を持ち、この自然を次世代に残していく義務がある。

私は、これからもたくさんの面白いことをやりたい、心が躍る体験がしたい。だから川、沢に行くだろう。そして、体全身で探検というものを味わいたいと思う。もちろんそのなかで、自然に感謝という気持ちを忘れずに、こ

れからも自然というフィールドのなかで活動していきたい。

(52代/1回生)



2003年秋 淀川筏下り合宿より

ワクワク。

加門 佐知子

中学の頃は、陸上部のサボリ魔で、高校の頃は写真部。関大に入ったのは文学部の映像文化専修で映画の勉強をするため。めんどくさがりな上に思いっきり文化系。そんな私が、文化会とはいえ探検部なんていうものすごいアクティブなところにいるのは、いまだに自分でも不思議。

探検部に入るキッカケも、実はゲームや映画からだったりする。“探検部”という文字を初めて目にした瞬間、私の頭の中では「ドラクエのような大冒険!」「ジブリのような大自然!」それ

から、大好きな映画のワンシーンが頭を駆け巡る。『明日、鍾乳洞に行くぞ』と言って、ほんとに突然主人公たちが鍾乳洞に行ってしまうシーン。憧れだった、普通に鍾乳洞に行くという感覚。かっこいい。探検部に入ったら、それが叶うと思って気がつけば入部。でも今は、川が中心とのことで、先輩に連れられ休みの日なんか川へ行く日々。鍾乳洞とは違うけれど、しんどいと思うこともあるけれど、なんだか楽しくやってるから、また不思議。

何より、生まれも育ちも大阪市内、祖母の家は徒歩5分圏内で帰省する田舎もない私にとって、探検部で行く自然だらけの場所(ほんとに怖いぐらい)は、とてつもなく新鮮で、魅力的でもある。なんだか、きっとこれはワクワクっていう感覚なんだろう。こういうワクワクをずっと持ち続けながら、どんどん大きなことに挑んでいければと思う。

入部して2ヶ月と少し。本当についていくのがいっぱいいっぱい、それでも「まだ2ヶ月しか経ってないんや」と思うくらいに濃くて、早い2ヶ月。実は、この原稿を書いている翌日から初めての合宿。頑張らなきゃ、一人前にならなきゃと思いつつも、ワクワクの方が大きかったりする。

(52代/1回生)